

The Beast that Shouted Love at the Heart of the Maelstrom

Ver.1.5.

K.Amano.

To All Personae & Shadows —

«««««««««««« The Beast that Shouted Love at the Heart of the Maelstrom

«««««««««««« **The Beast that Shouted Love at the Heart of the Maelstrom**

黄昏がゆつくりと降りてくる。私は岸壁からそれを見つめていた。

星のない空。太陽よりもそちらの方が私にはお似合いだった。私は昼よりも夜の生き物だったから。

ズボンの左ポケットに手を突っ込み、気付いて止めた。苦笑する。

分かっていったことだった。

タバコはどうにない。長年の癖は抜けそうになかった。

岸壁の足下から黒と白で彩られた細い道が無数に絡み合うようにして、水平線の彼方に向かって走っている。

荒涼とした、夜の迫る世界。

やれやれだ。

「この道を――」

背後から声。振り返りもせず、私はそれを遮った。

「この道だな」

「……そうだ」

小さなまだ少年の姿をした案内人。着古して変色しあちこちに穴が開いている服。

「僕はここまでだ」

何日も一緒に旅をしてきた仲なのに少年はひどくあっさりとして切り出す。

「これを持っていけ」

刃だけの、つまり柄のない短刀。もうひとつは小さな羅針盤。

「あんたの役に立つ、だろう」

私は軽く頭を下げて受け取った。小学校で使ったようなひどくちやちやなコンパスに見えた。逆に刃は見かけより重かった。

「この道の終わりに辿り着ければ、救われるだろう」

無表情な少年を見つめた。

「私が、か。それとも世界が、か」

少年が見つめ返してくる。

やがて、困ったようにわずかに笑った。

「……どちらも、だ」

私は剥き出しになった刃をハンカチで包み、シャツの端切れを使ってベルトに差す。こうして置けばうかつに羽で触れて怪我をすることもないだろう。

少年はここまで私を連れてきてくれた。七重の輪のすべてを越えてくれたのだから。それで十分だった。

ここから先は、私ひとりだ。行くべき道は開かれた。行くし

夜が近い。もう何度目の夜になるのか、私には分からない。夜、といっても、別にこれまで太陽が顔を出していたわけでもない。ただ空の色が変化していくだけだ。いまだに馴染むことのできないどこか異形の空。

震える手をポケットに入れ、まさぐってから、引き抜いた。苦笑する。

分かっていったことだった。

長年の癖だった喉飴は持って来れなかったのを思い出した。

岸壁の足下から黒と白で彩られた細い道が無数に絡み合うようにして、水平線の彼方に向かって走っている。

黒いねっとりした水と夜の世界。

ろくなものじゃない。

「この道を――」

案内人の声に私は頷いた。

「行くしかないんですね」

「……そうよ」

小柄な影が並ぶ。黄昏色をした少女。薄汚れたびれた服をまとった案内人だった。

「あたしはここまでしか案内できないけど」

そう断ってから、少女は私に向かって差し出した。幾日も一緒に断ったのにひどく冷静に見えた。

「これ、持ってたて」

一本の剥き出しの短剣。もうひとつは小さな羅針盤。

「あなたを守り、導いてくれる……多分」

「ありがとう」

素直な言葉に、少女はかすかに笑んだ。

「この道の果てまで辿り着けば、救われるわ」

少女の目を見つめる。

「世界が、ですか。それとも私が」

少女が見つめ返してくる。

やがて、困ったように、

「……どちらも、よ」

「すまない。君を困らせるつもりはなかった。それが君の仕事だしな」

背中や黒い水の魚のせいでボロボロになったシャツの残骸で刃をくるんでベルトに結びつける。残りは置いていくことにした。もうここからは必要にならないだろう。

ここから先は私ひとりだ。戻るべき道は閉ざされた。行くし

かない。

「僕の仕事はここまでだ。よい終末を」

羅針盤を腕時計のように左手に結びつけると、少年に囁いた。

「感謝しているよ。愛している」

「誰にでもそういうんだろ」

「もちろんだとも。私は世界を愛している。すべてを愛している。そうだろう」

黄昏の色が濃くなる中、少年は鼻を鳴らした。

「もう行きな。夜が来る」

私は黄昏の彼方へ続く道を見やり、頷いた。

「これは約束のおれだ。私にはもう必要ないものだし、これがすべてだから」

右のポケットから一枚の硬貨を差し出す。少年に出会うまではもう少しあったような気がするが、今では正真正銘最後の一枚だった。これまで私の手を通っていった、あるいは私の所有になった金銭からすると泣きたくなるほど、少額だった。が、ないよりもマシだし、他に感謝の方法を知らない。

少年は掌に落とされた硬貨を見つめ、それから私を見上げた。「あなたに会えて楽しかったよ」

その目が潤んだように見えた。もしかしたらそれは、私の方だったかもしれない。

「さよならだ、カロン」

少年から視線を外し、一度、深呼吸。

ためらうことなく、岸壁から飛んだ。

振り返らない。だから、少年がそれ以上見送ってくれたのかも、分からなかった。

そもそも、そんな余裕もなかった。

貳．【Deep Breath Deep Breath】

自分の中にあるものがすべて頭のとっぺんから抜け出していくような落下感。どこまでも続くようなそれ。

みるみる道が、迫ってくる。羽を使って方向と速度を調整する。案内人に会うまでは使った記憶のない羽だったが、役に立ってはいくれそうだった。

着地した瞬間、足の下で靴の刃から火花が飛び散ったのが分かった。膝で大半を打ち殺したものの、衝撃が足から頭まで走る。弾む、火花がこぼれる。

何故か、かつての相棒を思い出した。肝心なとき私を裏切っ

かなかった。

「あたしの仕事はここまで。さようなら、よい旅を」

腕にはめるためのものだろう。紐付きのコンパスを腕時計のように右手に結びつける。

「ありがとう」

少女は首を振った。

「あたしの仕事、といったでしょう」

黄昏の色が濃くなる中、少女は別れをもう一度告げる。

「さようなら。もう行った方がいいわ」

私は黄昏の彼方へ続く道を見やり、頷いた。

「これは約束のおれだ。私にはもう必要ないものだし、これがすべてだから」

左のポケットから一枚の硬貨を差し出す。元々金銭にたいして縁のない生活をしていた私だったが、これは本当に最後の一枚だった。お守りの代わりのようにしてポケットに入れたままにしていた。案内料を払うという約束は守らなければならない。それに、少女には感謝をしていた。

少女は掌に落とされた硬貨を見つめ、それから私を見上げた。「あなたに会えて嬉しかった」

ぼろり、とその目から涙がひとつこぼれた。七つの水を越える旅の間にはついぞ見せなかった表情だった。

「さよなら、シャロン」

少女から視線を外し、二度、深く呼吸する。

わずかな躊躇の後、岸壁から飛んだ。

振り返ろうとした。だが、少女がそれ以上見送ってくれたのかも、見えなかった。

そもそも、そのような余裕もなかった。

貳．【Deep Breath Deep Breath (arranged)】

情けなくもあげた悲鳴は、ずっと上に吹き飛んで行く。落下や速度を楽しむアトラクションはそもそも苦手だった私である。しかもこれは一度きりのやり直しなし、命綱も安全柵もマットもない。

無我夢中で羽を動かし、手足をばたつかせた。

着地した瞬間、硬い感触があった。骨が砕けたかと思うほどの痛みが下から上に駆け抜ける。バランスを崩しそうになったが、どうにか保った。

何故か、昔、友達だった人を思い出した。肝心なとき私が裏

た相棒。思い出したくもなかったのに。首をひとつ振り、羽ばたいた。

うまく落下を速度に変えたため、疾走に力がある。

そこへさらに、さらに羽ばたきを加える。

刃が道に触れるのが少し間遠になった。

道がわずかにうねりながらもおおよそまっすぐに続いていく。上から見たときにはずいぶんと細いように見えたが、実際は両手を広げたよりも余裕があった。急激に方向を変える必要も当面なさそうだった。火花が飛ぶ。頭がきしむ。

羽を傾けて姿勢を安定させる。周囲を見回す余裕も多少は出てくる。

道の外は黒い水だった。ねっとりとした水面には、時折光るものが浮かび上がり、沈むものを照らし出す。

滑走だか滑空だかしている私には、はつきりしたことはない。沈んでいるものの中には人の顔のようなものもあった、などと。

案内人の少年は教えてくれた。

「ここにはあんた以外の人間はいないんだ」

なるほど、七つの黒い輪を越えて少年と別れるまで誰一人見かけなかった。生物の気配すら、ない。

空を見上げる。すでに夜が舞い降りていた。星は、見えない。

道を見上げる。すでに夜が舞い降りていた。星は、見えない。道の少しくぼんだ場所にさしかかり、身体が跳ねた。着地と

同時にひときわ激しく火の粉が飛んだ。ふと気になった。かなりの速度が出ている。そのわりには風景に変化がない。どこまでも続く細い道。

跳躍して、身体をひねった。すぐさま着地。後ろ向きのまま滑走する。足下から吹き上がる火花が闇に散っていくのが分かった。自分の起こしたものが闇の中に消えていく。震えながら昇っていくものもあったし、落ちていくものもあった。事業の

ことも、家庭のこともまるで一緒に飛ばされていくようだった。溶けていく。火花だけではなかった。

――

遠くで、道が失われていくのが分かる。徐々に、だが確実に、私を通ってきた道が暗い水の中に崩れていく。ぼんやりと照らし出されていた道がなくなったことで、どのくらいあの岸壁から、案内人から離れたのかも、すでに分からない。

もう戻ることはできない。戻るつもりもない。

引つ張られるようにしてもう一度、身体をひねった。

危ないところだった。いつの間にか、状況が変わっていた。

切ってしまった相棒。

靴の底についている刃が火花のようなものをこぼしている。私はちょうどスケートリンクにいるような状態で、滑っていた。着地してすぐはたいした速度ではなかったが、足が勝手に動く。徐々に速度が上がっていく。そこへさらに、さらに羽ばたきを加える。

身体が軽い。運動不足だった頃が嘘のようだった。もしかしたら羽の使い方がうまくなっているのかもしれない。

道は、崖上から見たときにはずいぶん頼りないものだったが、実際はかなりの強度があり、しかも広かった。派手に転倒したりバランスを崩したりしなければ、落ちることもなさそうだ。刃が道を噛むたび、火花が飛び、頭が痛んだ。速度が安定してくると、あまり動かずにすむようになった。

そこでようやく周囲を観察することができるようになった。道の外は黒い水だった。光るものが浮かび、沈みしている。越えてきた七つの水と同じものだろうか。とすれば、私を襲ってきたあの奇怪な魚がいるのかもしれない。

案内人の少女は教えてくれた。

「ここにはあんた以外の人間はいないの」

なるほど、七つの黒い水を越えて少女と別れるまで誰一人見かけなかった。生き物だつてあの魚くらいだった。

空を見上げる。とうに黄昏は消えている。星は、見えない。

道を見上げる。すでに夜が舞い降りていた。星は、見えない。道の出っ張った場所にさしかかり、身体が跳ねた。着地と

同時にひときわ激しく火の粉が飛んだ。ふと気になった。かなりの速度で安定している。だいが来たと思う。だが、

いったいどれほどの岸壁から離れたのか。羽を下げて邪魔にならぬようにして、肩越しに振り返る。道

はまっすぐ続いているからそのまま滑走する。足下から吹き上がる火花が闇に散っていくのが分かった。ある光は黒い水面に

触れて溶けるように沈んでいく。別の光の粒は螢のようにふわりふわりと舞っていく。会社も同僚も友人のことも、家族のこ

とさえつまらぬことのように思えてきた。

――

遠くで、道が崩れていくのが分かる。ゆっくりと、だが確実に、私を通ってきた道が水の中に沈んでいく。ぼんやりと照らし出されていた道がなくなったことで、どのくらいあの岸壁から、案内人から遠くなったのかも、もう分からない。

もう戻れない。先に進むしかない。

追い立てられるようにして私は前を見た。

危ないところだった。いつの間にか、道の状態が変わっていた。

道が突然、途切れていた。少し先に道がまた続いている。盛大に放たれていた火花が途絶え、私はとつさに虚空を跳躍。下にあるのは黒い水面。道の途切れたところから水面を光の線が弾けるようにして流れている。そこへ落ちたら楽しくもないことが待っているだろう。

跳躍がどれくらい続いたのか。さらに羽であらがおうとした私の行く先に今度は白い広場のようなものが見えた。

広場からはいくつもの道が枝分かれしている。中には私の来たとあまり変わらぬ方向に出ているものもあった。どれもがぼんやりと白い光を放っている。広場の中心には、まるで不気味な目のようなものが描かれている。昔観た絵を思い出した。否。描かれているのではない。それは時折収縮して、蠕動していた。生きてるように。こちらを見ているように。

跳躍が終わった。

広場へ続く道のひとつに着地する。これまでと違って足下がだいぶ弱い。変な弾力があつた。それでも待ちかねていたように大きな火。私の中の力を吸い上げていくように。

同時に、左手にちくりとした痛みがあつた。くくりつけた羅針盤が動いている。手が勝手に上がった。同時にそちらへ引かれるように身体が傾く。まるで導かれるように。

私は足下の刃からさらに火花を吹き上げらせ、方向転換。左手にある細い道に飛び込んだ。再び硬い道を走り出す。

参．【Mass Destruction (arranged)】

不意に理解した。

火花が散るたびに、頭をかすめるものがある。

記憶だ。頭に浮かんで消えていくものたち。

ひたすら続いていた競争。吹雪の大陸。友人を蹴落としたこと。別の知人と手を結んだこと。その知人さえ裏切ったこと。裏切られたこと。とにかく自分が生きていくので精一杯だった。

一齣一齣が火花のほとばしりとなって闇に飛んでいく。故郷を飛び出したこと。

兄の死。

去ってしまった妹たち。

殴り合い。武器を持った喧嘩もあった。たくさん、血を流してきた。流させてきた。戦わねばならないことが多かった。そうしなければ生きていけなかった。

て、いきなり途切れていた。すぐ先に道がまた続いている。盛大に吹きこぼれていた火花が止まり、私の身体は宙に浮かんだ。夢中で羽ばたいた。黒い水が下にある。水の上を道と道をつなぐようにして光の粒が流れているように見えた。綺麗だったが、そこへ落ちることなど想像もしたくない。

浮遊はいつたいどのくらいだったのか。道の彼方に、今度は白い広場のようなものがあった。

その広場には私を通ってきたのと同じような道が通じていて、どれもがぼんやりと白い光を放っている。広場の中心には、薄気味悪い目のようなものが描かれている。古い映画を思い出した。

違う。描かれているのではない。それは時折収縮し、瞬きをしていた。生きてるように。こちらを観察しているように。

浮遊が終わった。

広場へ続く道のひとつに着地する。妙にぶよんとした感触があつて、転びそうになる。それでも待ちかねていたように大きな火花が飛んだ。私の中の力を奪い取るように。

同時に、右手にちくりとした痛みがあつた。羅針盤を見えない誰かが握っているかのように、手が引かれた。まるで導かれるように。

私は足下の刃からさらに火花を吹き上げらせ、進行方向を変え。右手にある細い道に飛び込んだ。再び硬い道を走り出す。

参．【Mass Destruction】

卒然と悟った。

火花が飛ぶ都度、頭をかすめるものがある。

記憶だった。脳裏に甦ってはばらばらになっていくものたち。

ひたすら続いていた競争。信じていた人たちに裏切られ、去られたこと。どれだけ頑張っても報われなかったこと。それでも自分や家族を養うために働き、生きていくので精一杯だった。

光景の一幕が火花のほとばしりとなって闇に溶けてゆく。故郷に留まり続けたこと。

兄との確執。

生まれることのなかった妹。

部下を怒鳴りつけたこともあった。口論も、意に染まぬこともやった。理不尽な命令をされたこともたくさんあった。そうしなければやっていけなかった。

もちろん、楽しい思い出もあった。

新しい家族ができたとき。何人かで組んで事業を始めたとき。子どもが試験で一等を取ったとき。時折母親が寄越した手紙の言葉。

これまで案内人に会うまで私がやってきたことが浮かんで消えていく。そして、消えていったものは戻らない。

ああ……

私はどれだけのものを得てきたのだろうか。

私はどれだけのものを失ってきたのだろうか。

もはやすべては遠い過去になりつつある。

取り戻すことはできない。

子どもたちは、私を反面教師としたのか、生真面目すぎるくらい生真面目だった。育てたのではない。育っていったのだ。

だが、その子どもたちもういない。

私の手には、何も残らなかった。

それでも、私の中に残っていた記憶が、次々に浮かび上がっては消えていく。

疾走に应じて、道が壊れていくように。

火花の眩きで、私の中の記憶が壊れていく。

裏切られた私がどうなったのか。裏切った知人はどうしたのか。

もう分からない。たしかに知っていたはずだったが、思い出せなかった。

大陸に渡った頃のこと、砕けて溶けた。

何から逃げていた。何から逃げていたのだろうか。

まだ若い私が、故郷から走り去る。

兄の死。

会うこともなくなった妹たち。

故郷。

ばらばらの記憶がひとつひとつ抜け落ち、さらに溶けてゆく。映画のフィルムをライターにかざしたように。一際大きく散ったのは、結婚したときの記憶だっただろうか。酒場で殴り合い、警官から逃げ、血まみれのまま宿に転がり帰った。細部まで思い出した。次の一瞬で碎ける。

私は走るのを止めることができない。

私は忘れるのを止めることができない。

何故。何故。何故――

答えるものなどない。

応じてくれるものはない。

無論、いい思い出である。

子どもを初めて抱き上げたとき。職場の同期と励まし合ったとき。子どもが駆けっこで一等を取ったとき。あの兄さえ祝福してくれた結婚。

これまで案内人に会うまで私がやってきたことが浮かんで消えていく。そして、消えていったものは戻らない。

ああ――

私はどれだけのものを得てきたのだろうか。

私はどれだけのものを逃してきたのだろうか。

もはやすべては遠い過去になりつつある。

やり直すことはできない。

子どもたちは、私を反面教師としたのか、奔放すぎるくらい奔放になった。育てたのではない。育っていったのだ。

だが、その子どもたちもういない。

私の手には、何も残らなかった。

それでも、私の中に残っていた記憶が、次々に浮かび上がっては消えていく。

疾走によって、道が崩れていくように。

火花の閃きで、私の中の記憶が消滅していく。

残された人々がどうなったのか。去っていった人たちがどうしたのか。

もう分からない。たしかに知っていたはずだったが、思い出せなかった。

故郷での苦しみ、ことが、崩れて散った。

何かに耐えていた。何に耐えていたのだろうか。

まだ若い私が、故郷をにらみつける。

兄との不仲。

会うこともなく亡くなった妹。

故郷。

ばらばらの記憶がひとつ、またひとつと落ちていく。壊れたジグソーパズルのように。一際大きく抜けていったのは、結婚したときの記憶だっただろうか。酒場で語り合い、酔漢にからまれ、血まみれのまま宿に転がり帰った。細部まで思い出した。次の一瞬でピースがなくなる。

私は走るのを止めることができない。

私は忘れるのを止めることができない。

何故。何故。何故――

誰も答えてはくれない。

応じてくれるものなどない。

四．【Want To Be Closed】

何かいる。
すでに相当私の中のものは削られ、吐き出され、そぎ落とされている。だからこそ、敏感になっているのかもしれない。
だが、案内人はいつていたではないか。この世界にいるのは私だけなのだと。
気配に音が続く。

脇を見た。
息を呑んだ。

いつの間にか、並行に無数の道が走っていて、そこに私と同じような格好で疾走しているものたちがいた。翼を持ち、私同様の格好をしている。どこか見覚えのある姿だった。記憶を探るが、とうに火花となつて散つたのか、思い出せなかった。

どういふことだ。

ぞくり、と背筋を冷たいものが走り、羽の根本が震えた。

右を見た。

隣の道にいた相手が、こちらを見ていた。だけではない。合わせ鏡のように、遙か彼方まで同じような図が見通せた。

相手がこちらに手を伸ばした。誘われるように、私も手を伸ばす。

指先が触れるか触れないか。その瞬間、強烈な火花が散つて、私は反射的に手を離す。

驚いた顔が、こちらを見ていた。おそらく、私も同じような表情を――

同じ、表情――？

見覚えがあるはずだった。相手は、私にひどく似ていた。ちよつとした造作、羽の色や形は異なっている。動きにも違いがある。

それでも、ひどく私に似ていた。

道が離れていく。

道は、ひどく複雑になっていた。進むにつれ、たくさんの道が上下にうねるようにして、高さを変えていく。そのひとつひとつに、火花をまき散らすものたちの姿。

私の道は右に左とゆるやかに曲がりつつ、彼方を目指している。それは、他の道も同じだった。

さつき伸ばして衝撃が走つた右手を見る。かすかに、しびれが残っていた。

四．【Want To Be Closed (arranged)】

何かの気配を感じる。
すでに私の中のものはかなりむしり取られ、奪われ、こそぎ落とされている。それゆえ、敏感になっているのかもしれない。
しかし、案内人はいつていたではないか。この世界にいるのは私だけなのだと。
気配に続いて、音がした。

横を見た。

はつとする。
いつの間にか、たくさんの道が並ぶように走っていて、そこに私と同じように滑っているものたち。翼を持ち、私同様の格好をしている。どこか見た気がする姿だった。記憶を探るが、すでに失われたのか、思い出せなかった。

何なのだ。

羽が身震いする。背中からじわりと冷たいものが広がった。

左を見た。

隣の道を走っていた顔が、こちらを見ている。だけではない。合わせ鏡のように、遙か彼方まで同じような図が見通せた。

私はこちらに手を伸ばした。誘われるように、相手も手を伸ばしてくる。

驚愕の表情で、相手はこちらを見ていた。きっと、私も同じような表情を――

驚愕の表情で、相手はこちらを見ていた。きっと、私も同じような表情を――

同じ、表情――？

見たことがある気がするはずだった。相手は、私にひどく似ていた。

わずかな仕草、表情、羽の色や形は違っている。動作もだ。それでも、ひどく私に似ていた。

近付いていた道が、遠くなる。

道は、ひどく複雑になっていた。進むにつれ、たくさんの道が上下の波を打ち、高さを変えていく。そのひとつひとつに、疾走するものたちがいる。

私の道は左へ右へゆっくりカーブしながら、彼方を目指している。それは、他のものも同じだった。

さつき伸ばして弾かれた左手を見る。かすかに、痛みが残っていた。

前を見る。

大きな広場が迫っている。例によって無数の枝分かれがある。これまで何度となく繰り返してきた形だ。しかし、今度は様子が違っていった。私は身をやや低くして、衝撃に備えた。

合・【シャドウ】

前方。

大きな広場が近付いている。例によって無数の合流。これまで何度となく繰り返してきた形だ。しかし、今度は少しばかり状況が違うようだった。私は羽を畳み、身を低くした。

無数の私に似たものたちが、私と同時に「眼」の広場に飛び込んだ。

ぎょろりと広場の中心部で「眼」が収縮する。

私と私に似たものたちは一斉にすれ違い、腕の羅針盤が導くまま、疾走する。

あちこちで白い電気に似た火花が飛び散り、天に駆け上っていく。

すれ違い、交差し、あるいは避け、あるいは身をかわし――

おのれの道へと走っていく。
そして、

私はたったひとりで、一本の道に飛び込んだ。

いったい、今のは何だったのか。あるいは、誰だったのか。

おぼろげながら、感じる。確信、といってよかった。

あれは、私だ。

特撮の映画に出てくるような、I Fの自分。もしかしたらそうであつたかもしれない私。そのようなものなのか。

道はゆっくりと上下している。

刃から火花が散っている。

頭をよぎるシーン。

頬が熱い。顎が痺れるような痛み。私は拳を握り込み、兄に向かつて殴りかかった。こめかみに当たった拳を振り抜く。兄は首をねじるようにして吹っ飛び、壁にぶつかって倒れる。広がる血。私は――

――違う。これは、私、

玄関先で出くわした父を突き飛ばし、草履履きのまま家を飛び出す。私の名を怒鳴る声。そのまま脇目も振らず――

――違う。これは、私、では、

帰りたい。帰りたい。故郷へ。一度だけでも。

私のいた場所へ。

――違う。これは、私、では、ない。

右手のコンパスがちくちくと刺激する。頭痛をこらえ、涙ぐみながら、針を見た。針は前ではなく、左を指し示している。

道が、違う。あの広場、あの交差。別の誰か。別の私の道。

私は、道のひとつに飛び込んだ。前後に走るものはいない。

いったい、今のは何だったのか。あるいは、誰だったのか。

閃くものがあつた。直観、といつてもいい。

あれは、私だ。

古いSFの小説にでも出てくるような、もうひとりの自分。

並行世界、別の時間軸の私。そんなもの。

道は軽い上りになったり下りになったりを繰り返す。

足下から火花が流れ去る。

脳裏に浮かぶ光景。

かまってくれなくなった母親に駄々をこね、手を引っ張る。

泣いている私。引っ張る私の力が予想外に強かったのか。母はバランスを崩し、私にのしかかるようにして倒れた。柱にごつりと頭をぶつける音がする。大きなお腹。広がる血。私は――

――違う。これは、私、

リノリウムの冷たい廊下。響く足音。赤いランプ。泣いている私。生まれることのなかった妹――

――違う。これは、私、では、

逃げ出したい。留まりたくない。どこかへ。一度だけでも。

ここではないどこかへ。

――違う。これは、私、では、ない。

左手のコンパスがずくずくと刺す。頭痛に顔をしかめ、針を見た。針は前ではなく、右を指し示している。

道を間違っている。あの広場、あの交錯。別の誰か。別の私

刃に弾かれる記憶は、私のものではない私の記憶。

刃で再生され壊れていく記憶は、すると、私の中にあるのではないのかもしれない。もしかしてこの奇怪な道のりそのものが――

私の記憶が、別の誰かに再生されている。それは耐えられることではなかった。

同時に、別の誰かの記憶を無理矢理見せられることなど。

コンパスは左を示して揺れている。だがそっちには、道がない。

だとすれば。私は目を閉じた。鋭敏すぎるほど鋭敏になった感覚。

まるで、私のすぐ下に重なるように、

下――
誰かが――

私は道の端を踏み切り、跳躍した。
上下一瞬のすれ違い。羽の音が聞こえた。

一瞬のすれ違いの後、無事に道へ着地する。何事もなかったように滑走が再開される。火花の回想は、今度こそ、私のものだった。壊れる関係。弱肉強食。強くなるために、強くなる決意。しかしその結果どうなったのか。私の記憶は穴だらけになっ

ている。
だが、それでもよかった。これは、私の記憶だ。

学生だった頃の記憶。

組の大半と敵対していたあの頃。肉体的精神的な痛みを耐え、

ただひたすら強くなりたかったあの頃。

強くなりたかったのだ。誰にも負けないくらい。

その想いもまた砕けて星となっていく。

何度、広場を過ぎ、道を駆け抜けたのだろうか。幾度となく、

他のものたちとすれ違いもした。

もう私は空っぽに近い。

あの崖からのくらしいやつてきたのだろう。

その長い道程にもついに終わりが見えてくる。

そんな気がしていた。

道が盛り上がって坂になる。

まるで私の人生のようだった。

速度と羽ばたきで一気に駆け上る。

崖のように、道が途切れていた。

私は否応なしに跳躍する。

の道。刃に弾かれる記憶は、私のものではない私の記憶。

刃で掘り起こされては流れ去る記憶は、こうなると、私の頭に残っているのかどうか怪しいものだった。もしかしてこの奇妙な行程そのものが――

私の記憶が、別の誰かに見られている。それは耐えられることではなかった。

同時に、別の誰かの記憶を否応なしに体験させられるなど。

コンパスは右を示して揺れている。だがそちら側には、道は見えない。

ならば。私は目を閉じた。中身を削られることで研ぎ澄まされていった感覚。

まるで、私のすぐ上に重なるように、

上――
誰かが――

私は道の端を踏み切り、跳躍した。
上下一瞬のすれ違い。羽の音が聞こえた。

一瞬のすれ違いの後、無事に道へ着地する。何事もなかったように滑走が再開される。火花の回想は、今度こそ、私のものだった。壊れる関係。弱肉強食。強くなるために、優しくなる決意。しかしその結末がどうなったのか。私の記憶はすでに虫食

い状態だ。
だが、それでも安堵する。これは、私の記憶だ。

学生だった頃の記憶。

クラスの一部と敵対し、大半に無視されていたあの頃。肉

体的精神的な痛みを耐え、ただひたすら強くなりたかったあの頃。

優しくなろうとしたのだ。誰も傷つけないくらい。

その想いもまた粉々になつて彼方へ消えていく。

幾度、広場を抜け、道を通り過ぎたのだろうか。幾度となく、

他のものたちと接近もした。

すでに私は空虚に近い。

あの崖からのくらしい時間が経過しただろう。

その長い道程にもついに終わりがやつてくる。

そんな予感があつた。

道が盛り上がって坂になる。

まるで私の人生のようだった。

速度と羽ばたきで一気に駆け上る。

崖のように、道が途切れていた。

私は否応なしに跳躍する。

無数の私が、同時に跳んでいるのを知った。

ひどく、身体が軽かった。

もうすでに私の中に残されているものがわずかになっているからかもしれない。
もう時間が、ない。

そう思った。

瞬間、真つ黒な闇に包まれていた。

ある私は無理して設置したホームシアター室の暗さを連想した。

ある私は不眠のため昼でも眠れるようにと購入したカーテンを思い出した。

ある私は怒られるのを恐がつて閉じこもった押入を頭に浮かべた。

方向感覚も時間の感覚も失わせる闇。

その闇はしかし薄い幕のようで、すぐに切れる。

先に見えるのは、道の終着点。

途切れた道の向こうには、黒い水の巨大な渦があった。

黒い水はかすかな光を含んでゆつくりと、確実に、激しい流れを作っている。

道は途絶え、そこに行くしかない。

道は失われ、そこで吞まれるしかない。

もう止まらない。

もう戻れない。

私たちは、最後の疾走に備え、それぞれの道に着地する。

六・【全ての人の魂の戦い】

最後の疾走が始まる。

時折、火花が飛ぶ。道をこすつても、最初の頃のように派手

なものには起きない。それだけでも終わりが近いことが分かる。

身体にもほとんど力がない。ただ、速度だけがあった。

火花が喚ぶ記憶。

初めて人を好きになったときのこと。私は告白し、見事に振

られた。しかし、それでもその人を好きになったというのはい

はっと気付く。

これは本当に私の記憶なのだろうか。また別の誰かのものでは

ないのか。

すでに、私にはどちらがどちらとも分からなくなっている。

記憶の混濁。

記憶の欠落。

走る。走り続ける。碎ける。燃える。飛び散る。

終わりはすぐにやってきた。

六・【全ての人の魂の詩】

最後の疾走が始まる。

時折、火花が飛ぶ。道をこすつても、最初の頃のように派手

なものには起きない。それだけでも終わりが近いことが分かる。

身体にもほとんど力がない。ただ、速度だけがあった。

火花が喚ぶ記憶。

初めて人を好きになったときのこと。私は告白し、見事に振

られた。しかし、それでもその人を好きになったというのはい

はっと気付く。

これは本当に私の記憶なのだろうか。また別の誰かのものでは

ないのか。

すでに、私にはどちらがどちらとも分からなくなっている。

記憶の混濁。

記憶の欠落。

走る。走り続ける。碎ける。燃える。飛び散る。

終わりはすぐにやってきた。

道が終わる。
道がなくなつた以上、火花はもう飛ぶことはないだろう。

私は宙を舞つた。

もう羽ばたく力も残されていない。

それでも、私の中にあつた記憶が掘り起こされる。火となつて飛ばなかつたところを見ると、まだ中に残っているらしい。

それは、

この世に出でて一月も経たぬくらい、

目もまだよく見えぬ頃、

暖かい手に抱かれ、

言葉も解さぬ私は、

柔らかな声をかけられ、

笑つた、

あの記憶――

祝福の、言葉――

渦が迫る。迫る、迫ってくる。

私は自分が泣いていることを知つた。

私はどれだけのものを失ひ、

私はどれだけのものを得てきたのか。

これは、私の中に残しておいていいものではない。

手放さなければならぬ。

渦に沈めるわけにはいかない。

散らすのだ。

何故だか分からないが、そんな気がしていた。

これは、私のものなのか。私のものでないのか。

どうでもよかつた。

かつて愛された証。

かつて愛した証。

ただ、

祝福を。

恐れるな。

私は、ベルトの刃を抜き、あの案内人にもらつた刃をかざし、

道が途切れる。
道が終わつた以上、火花がもう散ることはないだろう。

私は宙を舞つた。

もう羽ばたく力も残されていない。

それでも、私の中にあつた記憶が掘り起こされる。火となつて飛ばなかつたところを見ると、まだ中に残っているらしい。

それは、

この世に生まれてまだ一ヶ月も過ぎないくらい、

目もまだよく見えぬ頃、

暖かい手に抱かれ、

言葉も解さぬ私は、

柔らかな声をかけられ、

笑つた、

あの記憶――

祝福の、言葉――

渦が迫る。迫る、迫ってくる。

私は自分が泣いていることを知つた。

私はどれだけのものを得、

私はどれだけのものを失つてきたのか。

これは、私の中に残しておいていいものではない。

手放さねばならない。

渦に沈めるわけにはいかない。

飛ばすのだ。

何故だか分からないが、そんな気がしていた。

これは、私のものなのか。私のものでないのか。

どうでもよかつた。

かつて愛された証。

かつて愛した証。

ただ、

祝福を。

恐れるな。

私は、腰の短剣を抜き、あの案内人にもらつた刃をかざし、

自分の胸に突き立てた。

七・【When The Moon's Reaching Out Stars】

宙を飛んだ私たちは、渦に飛び込む。

黒い水。忘却の水。奈落の水。混沌の水。

世界の中心だった。
すべてがここで滅びゆく。

ぼんやりと光をはらみながら、
渦を巻いている。
たくさんの私たちが渦にいる。
渦を巻いている。
大渦の中心にあるのは、

—— 世界の中心だった。
すべてがここから生じる。

渦に巻かれながら、私はひどく冷静だった。

空を見上げる。
たくさんの私たちが、
空を見上げる。
たくさんの星が見えた。
あの星々は——

いつからあったのか。
星が揺れている。
揺れながら空を漂っている。
多分、あれは、

—— いつから出ていたのか。
星がたゆたっている。
たゆたいながら光っている。
おそらくあれは、

私だ。
私たちの中から生まれたもの。
天のそれも。
水の中のそれも。
私たちなのだ。

ぼつかりと丸い月があった。
それは光りながら、昇っていた。

—— ぼつかりと丸い月があった。
それは光りながら、昇っていた。

ああ、と思う。
私の胸に空いている穴。
そこからえぐり出された記憶。
最初の記憶。
最後の記憶。
無数の私たちが自ら放った火。
寄り集まり、大きな光となって、

あの刃は、

—— あの短剣は、

すでに渦のどこかへ消えてしまっていた。
刃だけでなく、

羽も、
刃のついた靴も、
身につけていたわずかなものさえも、

羽も、
刃のついた靴も、
身につけていたわずかなものさえも

奪われ、
削られ、
ばらばらになり、
流れに吞まれていった。
そこにいるのは、
ただの獣たち。

月が昇っていく。

—— 月が昇っていく。

昇っていくのは月だけでない。

私が、

—— 私、

私たちが、これまでこぼしてきた、落としてきた、飛ばしてきた、
なくしてきた、削ってきた、忘れてきた、火花。
あるいは水に沈み、あるいは天に昇り。
あの月が星に届いたら、
あの記憶は誰かに届くのだろうか。
月が星に届いたら、
あの想いが星に届いたら、
新たな誰かに祝福を。

神よ——
祈りを——

—— 神よ——
祈りを——

世界の中心から。
世界の中心へ。
過去から未来へ。
未来から過去へ。
祝福を。

「愛を」
私は叫んだ。

—— 「愛を」
私は叫んだ。

誰のためでもなく、
誰にでもなく。

叫んだ。

月が揺らめく、
視界が揺れる。
もうそこまで来ている。
もう底まで来ている。
そして私は大渦の中心に

誰のためでもなく、
誰にでもなく。

砕け散っていく身体。
砕け散っていく意識。
塵となっていく。
塵に帰っていく。
それでもなお、
私は、私たちは――
獣は、獣たちは――

―― 叫んだ。

叫んだ。叫んだ。
叫び続けた。

―― 月が揺らめく、
視界が揺れる。
もうそこまで来ている。
もう底まで来ている。
そして私は大渦の中心に

消え

B.G.M. 《BURN MY DREAD - REINCARNATION:PERSONA3》